

天津日本人学校の国際理解教育

前天津日本人学校 教諭

北海道余市郡余市町立西中学校 教諭 森 山 貴 美

キーワード：現地理解，異文化理解，日本文化理解，国際交流

1. はじめに

日本と中国は地理的には近いが、テレビやインターネット、新聞、雑誌等マスメディアで繰り返し目にする情報は、二か国間の政治的な緊張や歴史観の違い、大気汚染問題などが多く、お互い心理的には大きな距離があるように思う。私が中国にある天津日本人学校に勤務していた平成23年度～25年度の3年間では、尖閣諸島をめぐる反日デモや鳥インフルエンザ、PM2.5などにより、学校行事の実施やその内容がかなり影響を受け、児童生徒たちにとって、滞在国にマイナスイメージをもつ大きな要素となっていた。しかしながら、実際に中国で長期間生活してみると、長い歴史をもつ中国の文化の深さに感動したり、中国の人々の優しさにふれて心が温かくなったりすることが多いことに気がつく。児童生徒が、滞在国での様々な学習の機会を通して、驚きや感動を味わい、ものの見方や考え方を広げ、ステレオタイプによるものではなく、自分の目で見たものや心で感じたものを軸にしてものごとを判断し、自分の世界を切り開いていけるようになることを願い、天津日本人学校では、様々な国際理解教育を展開してきた。

2. 研究の目的

発達段階に応じた体験的な国際理解学習を通して、その学習内容やそれに関わる人々を身近に感じ、興味を深め、公正・公平かつ建設的なものの見方や考え方を身につけさせ、将来にわたって様々な背景をもつ物事や人々とともによりよく生きようとする態度を育成する。

3. 研究の方法

「調べ学習や交流会の練習等の事前学習」→「体験的な国際理解学習の実施」→「事後の振り返りとまとめ、発表」を基本的な学習サイクルとし、それぞれの過程において、児童生徒の技能や心理的な変化について見とりを行い、フィードバックする。教師から児童生徒へのフィードバックや児童生徒間のフィードバックを通して、児童生徒が自身の技能の向上や心理的な変化に気づき、各学習サイクルが有機的につながる学習活動を展開する。

4. 研究の内容

(1) 中国文化の体験学習

平成25年度の中国文化の体験学習は、中国や天津の文化について体験的に学ぶことを通して、異文化に対する興味や理解を深めることと、グループ活動や調べ学習の進め方についての基礎的・基本的な知識や技能を身につけさせることをねらいとして、5月の労働節の連休後に一日で行われた。各学年の学習内容は以下の通りである。

小学部1～2年生…中国ごま（ジャグリング道具のディアボロに似た空中で回転させるタイプの独楽）

小学部3年生 …泥人形（泥を原料とし、人物や動物を形作る伝統的な民間工芸品）

小学部4年生 …剪紙（専用の小刀を用いて紙の上に花や動物、人物などを表現する切り紙細工）

小学部5年生 …餃子づくり（中国の主食の一つであり、華北で主流の水餃子の調理実習）

小学部6年生 …花文字（鮮やかな色と独特な書き方で、様々な動植物を用いて文字を表現したもの）

中学部1～3年生…葫蘆絲（中国の民族楽器のひょうたん笛）

それぞれの中国文化の専門家である方々に、一日天津日本人学校の講師として来校していただき、それぞれの内容に応じて、実演や概要説明、実演、創作、調理等の指導、質疑応答などの学習活動を展開していただいた。児童生徒たちは、五感を十分に使って中国文化を楽しみながら学ぶことができた。

(2) 中学部2年生修学旅行

平成25年度の中学部2年生の修学旅行は、5月の下旬に2泊3日の日程で、大連・瀋陽方面で実施した。当初は、上海・蘇州方面で実施予定であったが、鳥インフルエンザの影響で変更を余儀なくされた。中国遼寧省にある大連と瀋陽は、九・一八歴史博物館、中山広場、旧大和ホテル、大連港など、日本の統治時代ゆかりの建物が多く、当時から今日に至るまでの日中関係について学ぶよい機会となった。特に、九・一八博物館での見学は、生徒たちにとって歴史と共に自分たちが担っている平和について考える有意義な学習の場となった。



満州国への玄関口として多くの日本人が降り立った歴史を持つ大連港



満州事変の引き金となった柳条湖事件が起きた場所

(3) 韓国人学校との交流会

天津市内には、天津日本人学校のように、天津で暮らす韓国人の子弟のための韓国の教育制度に基づいた韓国人学校がある。平成25年度は、この韓国人学校からの要請を受けて、10月の中旬に天津日本人学校の中学部生徒が交流会を実施した。まず、韓国人生徒が天津日本人学校へ到着すると、体育館にて歓迎の和太鼓演奏で出迎えた。この和太鼓演奏は、日本人が多く暮らす九河国際村での夏祭りやこの韓国人学校との交流会後に実施された国際学校の行事においても披露するなど、中学部が全学期を通して取り組んでいる日本文化理解の学習活動の一つである。和太鼓演奏のあとは、お互いに打ち解けるための自己紹介ゲームを行い、それから天津日本人学校生徒による日本文化紹介が行われた。様々な自然の素材を生かした昔遊びという内容で、お手玉やこま、けん玉や羽根つきについて英語で説明し、一緒に遊びながら交流を行った。最後は、日本人学校対韓国人学校との交流バスケットボール試合を行って交流を深めた。

(4) IST UN-DAY

天津日本人学校が建つ天津市津南区双港鎮微山南路には、すぐそばに天津経済技術開発区国際学校天津分校(International School of Tianjin)という国際学校がある。このISTの学校行事であるUN-DAYに天津日本人学校中学部の生徒が参加をし、異文化理解や日本文化理解を深めている。UN-DAYとは国連デーのことで、1945年10月24日に国連憲章が発効したことを記念して設けられた国連の記念日である。世界各国で記念行事が行われ、ISTでは毎年学校行事として取り組んでいる。天津日本人学校では、様々な国の文化に触れ、交流を深めることにより幅広い国際感覚を身につけることと、普段学習している外国語を実践的に用いることでコミュニケーション技術の向上を図ることをねらいとし、参加している。平成25年度は、この行事の参加の直前に韓国人学校との交

交流会を実施していたため、よく伝わるためのプレゼンテーションの仕方や自然な交流場面におけるコミュニケーションの図り方について、生徒ひとりひとりが自己の課題をしっかりと認識し、準備をしっかりと行ったため、当日は大変有意義な交流が展開され、達成感を感じた生徒が多かった。民族衣装によるパレード、シアターでの各国の歌や演奏の披露、時事問題や異文化理解のプレゼンテーションやディスカッション、保護者ボランティアの方々の協力による世界各国家庭料理体験等々、異文化理解や国際理解を深めることができた有意義な一日となった。また、この経験が今後の滞在国での日常生活や学習への取り組み方について、大きな動機づけとなっている。

(5) クラブ活動での中国民族楽器体験

天津日本人学校のクラブ活動は、サッカー、バスケットボール、卓球、陸上・器械運動、文化の5つである。私は、天津日本人学校の最後の平成25年度は、文化クラブを担当し、小学部5、6年生の部員たちと葫蘆絲という中国の民族楽器の演奏に取り組んだ。葫蘆絲は、ひょうたんが取り付けられた中国雲南省の民族楽器である。この楽器について概要を学習し、中国や日本、海外の曲などを練習して、一曲一曲をみんなで完成させることを通して、中国の文化を身近に感じ、慣れ親しむことができた。葫蘆絲は運指を覚えると比較的簡単にメロディーを奏でることができる。しかし、優しいきれいな音色を出すためには、安定した息の吐き方や息継ぎのタイミングなどを何度も練習をしなくてはならない。小学部5、6年生の部員たちは、単調な音出しを繰り返したり、演奏を聴き合って意見交換や課題の確認をしたりして、ハーモニーを奏でようと頑張っていた。本年度最後の全校朝会では、1年間の集大成として、SMAPのヒット曲「世界にひとつだけの花」を披露することができた。

5. 研究のまとめ

体験的に異文化理解、国際理解を深める学習活動を設定することによって、調べ方や交流会・発表会の企画の仕方、それらの推進の仕方、言語の運用能力等を向上させることができた。また、体験的な活動を通して、児童生徒の五感を刺激し、事前学習からその活動の実施、事後学習とフィードバックを繰り返すことによって児童生徒のものの見方や考え方に広がり生まれ、滞在国や世界を自分と関わりがあるものとして、身近に感じている様子を見とることができた。さらに具体的な進路について考える中学部生徒においては、外交官になることや環境問題や第三世界の医療に携わるといった希望を持ち始めた生徒がおり、職業を通して、世界平和や人類の諸問題の解決に貢献しようとする生き方を目指している。天津日本人学校の児童生徒が、将来にわたり、ここ天津で暮らしたことや学んだことをきっかけにして、日本人としての土台をしっかりと築くとともに、様々な背景をもつ事象や人々とよりよく関わりながら、日本と中国、世界を繋ぐ架け橋になることを目指そうとする大きな動機づけとなった。

6. おわりに

天津日本人学校での3年間は、在外教育施設である特色を生かした国際理解教育実践に従事することができ、私自身も日本と中国、日本と世界のよりよい関係作りを改めて考える大変貴重な機会となった。滞在国での安全で有意義な教育活動の展開には、天津日本人学校の中国人スタッフや現地の諸関係機関の協力と支援が不可欠であり、実に多くの人々のご支援、ご協力で深く感謝している。自分から主体的に働きかけることや人々とふれあうことにより、見たり聞いたりしただけではわからなかったことが、実感をともなった理解となって心に残ったり、対話をすることによって友好的な関係が深まっていったりする過程を多く経験することができた。未来を担う子どもたちの草の根レベルの交流体験は本当に意味がある活動だったと感じている。実際に未来の彼らが、日本と中国、世界を繋ぐ友好の架け橋となって世界中で活躍していくことを切に願っている。